

シニア

市町村への通報徹底を

厚生労働省によると、2011年度に介護施設職員から虐待を受けた高齢者は151件、相談・通報は687件だった。長年、虐待問題に取り組み、24時間、利用者と顔を合わせる環境は職員にとって恐れがある」との自戒の言葉は、介護現場のリスクの大きさをうかがわせる。

講師を務めた日本大の山田祐子教授(社会福祉学)は「24時間、利用者と顔を合わせる環境は職員にとって恐れがある」との自戒の言葉は、介護現場のリスクの大きさをうかがわせる。

田祐子教授(社会福祉学)は「座らせた」「大声や罵声を浴びせてしまった」先頃、神奈川県内のある社会福祉法人が開いた虐待防止のための内部研修会。特別養護老人ホームやグループホームのスタッフが、職場での自己点検を通して明るみに出た「不適切なケア」について報告し合った。スタッフの「介護を受けた人の気持ちを考えずにケアを進めると、虐待につながる恐れがある」との自戒の言葉は、介護現場のリスクの大きさをうかがわせる。

欠かせない介護者ケア

支える人の心得

- 一人で悩まず誰かに相談を
- 完璧を目指して頑張りすぎないこと
- 介護生活一色にせず自分の楽しみを見つけること
- 家族、医療・福祉の専門家など皆で役割分担を
- 1日1回でも笑い、明るい気持ちで
- 介護者の会に参加して仲間をつくること
- 施設や高齢者住宅も視野に入れ活用を

*「川上由里子の“やさしい”ケアガイド」より抜粋

その上で、原因や対策を他の職員と一緒に考える支援態勢を構築することが必要と指摘。「利用者への言葉遣いを直しても1ヵ月程度で元に戻ってしまうと聞く。自己点検を継続的に行ってください」と施設側に要望した。

家族や親族による在宅介護では密室度が増すため、川上由里子さんは自らの悩みなどを聞いてもらう機会も少ないはず」と参加した職員の気持ちを思いやる。

悩み抱え込まず相談

事態が深刻化するケースも多い。「虐待までいかずとも頭につくことはある。その感情を一人で抱え込まず、チームで介護することが大切」。介護コンサルタントの川上由里子さんは自らの経験を基に、こう語る。中部地方に住む父親(88)は入浴などに介助が必要な「要介護2」。普段つきっきりの母親にリフレッシュしてもらうため、川上さんは2週間に1度、実家に帰る。「食事や排せつのケアだけでなく、留守番や情報収集も立派な介護」と川上さんは自分の同級生も名を連ね、隣町に住む兄の友人が駆けつけてくれたこともあります。

「少しづつ協力しあえば負担は減る。現行の介護保険制度に支える側へのケアがない中、家族だけではなく地域の一人一人が優しさを持ち寄るべきです」

場合は、速やかに市町村に通報しなければいけないとする。山田教授は「施設側が隠さずに報告するようになつた真もあるが、全般的には通報を徹底していく時期にある」と話す。

老人ホームでの入居者への傷害事件など、介護現場での高齢者虐待が後を絶たない。サポートが必要になった時、シニア世代が施設や自宅で快適に暮らすためには、介護をする人たちへのケアや適切な指導も欠かせない。

高齢者虐待防ぐには